

知識社会とエスペラント

大庭篤夫

ダニエル・ベルの「脱工業社会の到来」は 1973 年に出版されたのであるが、コンピュータの進化するアメリカ社会における来るべき社会の先駆的構想であった。ここにおいてすでに、専門職や知的技術職の重要性が高まることが強調されている。そしてこれまでの工業社会に見られる物的資本ではなく、知的資本が新しい社会における権力と地位の基礎をつくることになるかもしれないといっている。その後コンピュータは次々と進歩してメインフレームの時代からパソコンの時代へと進み、その後インターネットが爆発的に普及した。また 1989 年にはベルリンの壁が崩壊して社会主義体制の劣化が明らかとなった。このように新しい社会の到来を知らせるかのような技術や政治の進展とともに、知識社会とか知識資本主義社会という言葉が随所で使われるようになった。

(1) ドラッカーのポスト資本主義社会

ドラッカーは「ポスト資本主義社会」という著書で知識の観点から産業革命以後を次の3つに分類している。

イギリスに産業革命が 1770 年頃起こり、1870 年頃まで約 100 年間続いた。このとき、知識は「道具」、「工程」、「製品」に適用された。このようにしてテクノロジーが出現した。

ついでアメリカにおいて F・テーラーによって 1880 年頃テーラーシステムが生まれ、生産性革命が 1950 年頃まで続いた。

これによって知識が仕事に適用されるようになった。この手法によってモノを作ったり運んだりする仕事の生産性が非常に上がり、欧米や日本ではいわゆる、プロレタリア階級はなくなった。

ついで 1950 年以後起こったのがマネジメント革命である。これはドラッカーの命名であり、彼はこの特長を知識が知識に適用されると言っている。これ以来、知識が資本と労働をさしおいて最大の生産要素となるポスト資本主義社会となった。まだ知識社会とはいえないが、経済は知識が中心となる知識経済である。知識社会にあっては(イ)知識が肉体労働の領域に浸透し、すなわち知識が肉体労働にとって代わる。(ロ)純粋知識労働者が次第にその数を増す。知的専門職、上級管理職や工学、生命科学、ナノテクなどの科学分野のスタッフに対する社会の需要が増える。トマス・スチュアートは知識資本とは富を創出するための活用可能な才能、スキル、ノウハウ、ノウホワット、人的、組織的關係およびこれらを具現化する機械やネットワークとしている。いずれにせよ貸借対照表にのらない知識の分野が増大している。

(2) 知識社会とグローバル化

1989 年のベルリンの壁の崩壊で象徴されるように世界が市場経済化され、それに伴いアメリカ主導のグローバル化の進展には、反対する議論も多い。しかしインタ

ーネットで代表される技術の進展は、必然的に地球規模で人と人、組織と組織とのつながりを増す。

仕事のグローバル化

インドは今そのソフトウェア産業が注目されている。1995年度の11億米ドルの生産額から1999年には57億米ドルとなりこの間毎年50%の成長率である。とくに注目されるのがオフショア・サービスである。これはデータ通信の発達によってインド国内から海外の顧客にサービスをするのである。榊原英資氏の「インドIT革命の驚異」によればIT産業で成功したインドを代表する企業であるウィプロ社ではアメリカのシリコンバレーで夜に注文を受けたソフトウェアを翌朝には仕上げるといふ。インドのソフトウェア産業が急成長をとげたのはサンスクリット語はインド・ヨーロッパ語に属しているため、インド人は英語が出来るということと6世紀にインドで零が発見されたように数に優れた人材が豊富と言う2点が理由だということである。このようなインターネットなどを使った仕事のグローバル化はますますさまざまな場面に現れるであろう。

消費のグローバル化

アマゾンドットコム社によって書籍が配達可能な地域ならどこへでも販売されるようになった。またそのネット上の在庫は普通の書店では不可能な量である。現在、ホテルの予約システムは日本からヨーロッパ、アメリカ、アジアなどの多くの国で機能している。買いたいものが世界の多くの国から直接買え、アクセスの方法がさまざまに発展することは確実である。

研究のグローバル化

現在、研究のグローバル化が進んでいるが論文発表などにおいて英語で発表さ

れるかされないかによって日本人の研究者の評価には大きな開きができる。当分英語の影響力がつよいと思われるが研究においてもさまざまな民族が参加してきているのですばやいコミュニケーションが求められている。

(3) グローバル化とエスペラント語

インターネットの普及は必然的に異なった文化出身者の出会いの機会が多くなることを意味する。企業経営において異なった文化、異なった言語出身者を統合することは難しい。しかしこの難しさを克服すれば大きなメリットが得られる。なぜならば異なった要素の組み合わせから新しい知識が生み出されるからである。この意味においてエスペラント語のような計画言語は来るべき知識社会に有用である。以下その点を述べよう。

学習コストが少なくて済む。

エスペラント語は1887年にポーランド系ユダヤ人であるL.L.ザメンホフによって計画的に出来た言葉である。テーラーはモノを作ったり、運んだりする仕事の分析を動作研究と時間研究によって行い生産性が画期的にあがる方法を開発した。同様に、ザメンホフもいくつもの言語を分析し、平易な文法、優れた造語法、聞き取りやすい発音、品詞が即座に理解され、どの語がどの語を修飾するかがたちまち了解され、文章の理解度が早い言葉を開発した。したがって大学などの研究機関、企業の研究開発などますますスピードが要求される趨勢にある中で、これは大きなプラスである。この言葉を学習に活用すれば、外国語学習の落ちこぼれがずっと少なくなる。テーラーによって物質面の豊かさが増したたように知識面の豊かさが増すであ

ろう。

異文化理解を促進する。

イスラエルとパレスチナとかイラク問題のように宗教とか民族にかかわる紛争が頻発している。航空機や通信の発達によって世界は狭くなり、人口の増加した世界で紛争を減らすためには異文化の相互理解が重要になっている。ザメンホフが帝政ロシアの支配下のポーランドのビヤリストックでロシア人、ドイツ人、ポーランド人、ユダヤ人の相互理解を平易な共通語で解決しようとした試みからエスペラント語は出発した。ザメンホフはユダヤ人であったので帝政ロシアで差別と迫害に苦しんだ。ユダヤ人が選ばれた民であるという選民思想ではなく諸民族が平等な立場で相互理解できる言語を創造した。異文化の理解は平等な立場で異なった文化の人々が直接交流するのが望ましい。毎年開かれる世界エスペラント大会には50カ国以上の人々が直接交流している。そして自国の文化に誇りを持ち、しかも相手の文化も尊重する考えで世界の各地のエスペランティスト(エスペラント語を話す人)はこの思想に共鳴している。いまやこの思想が非常に必要となっているのである。

オオバ方式

エスペラント語は、母音が5つであり日本人にも非常に学習が容易であるにもかかわらず必ずしも速く上達しない。長年その理由を探り、オオバ方式という方法を開発した。

常に会話をして、とくにさまざまな形で質問ができる方式を発展させた。先日もベトナムからヨン・キウ氏が来日したので、エスペラントの学習を始めて40日位の学生と交流したがかなり会話が通じ、交流の実があがった。日本人の英語の能力は語彙も文章の構造も非常に異なるためなかなか上達しない。とくに英語で文章を書く能力が伸びない。オオバ方式でエスペラント語を勉強すれば熱心に週に2時間1年で充分話せ、読み書きできる人を養成できる。そののち英語を学習する方法も成果が確実に上がる。すでにさまざまな実験例がある。

(4) おわりに

21世紀は知識が主要な資源となるという考えは先進国を中心としてグローバルに浸透しつつある。ビジネスが1国だけではなくグローバルに展開しているが、人材の教育訓練と人材の獲得もグローバル化するであろう。その場合、大学でも企業でもより多くの人々が速く言葉の習得できることが望ましい。エスペラントはいまだ十分に認識されていないが新しい方法で訓練すれば大学では学生の実力が上がるし、企業ではさまざまな文化出身者とのコミュニケーションがとれ競争優位を築けるであろう。